

press release

COLLECTION EXHIBITION
Individual Masterpieces



刺繍(スズニ) (部分) ショワタケル 1850年頃 広島県立美術館蔵

秋の所蔵作品展

名品アラカルト

2020年10月1日(木)～12月24日(木) 2階展示室

[開館時間] 9:00～17:00 (金曜日は19:00まで開館) ※入場は開館の30分前まで

[休館日] 月曜日 ※特別展会期中・祝日・振替休日を除く ※11月9日(月)は展示替えのため閉室

[入館料] 一般510円/大学生310円 ※20名以上の団体は一般100円、大学生60円引き

[縮景園共通券] 一般610円/大学生350円 ※特別展は別料金

※高校生以下無料 ※当館で開館中の特別展入館券にて無料でご覧いただけます。

※障害者手帳をお持ちの方や65才以上の方、県内の大学に在学する留学生の方などは無料(1階総合受付でお申し出ください)。



広島県立美術館
Hiroshima Prefectural Art Museum

<http://www.hpam.jp/>

〒730-8014 広島市中区上本町2-22 TEL083-221-4391 FAX083-221-1494



【概要】

秋の所蔵作品展 名品アラカルト

1968(昭和43)年に開館した広島県立美術館は、1996(平成8)年に現在の建物に生まれ変わり、所蔵作品展と特別展という両輪によって美術の魅力を発信しています。当館は開館以来、多くの方々のご協力を得て、コレクションを充実させてまいりました。収集重点方針として「広島県ゆかりの美術」「1920～30年代の美術」「日本およびアジアの工芸」を掲げ、現在は総数5,000点を超えています。

さて、今期の所蔵作品展では、所蔵作品アラカルトと題し、幅広い年代の方々にお楽しみいただける展示を行います。清涼感漂う単色磁器の青磁と白磁と青白磁、1917年のロシア革命期以降に展開をみせたロシア・アヴァンギャルド、呉市安浦出身で今年没後20年を迎える洋画家・南薫造、縮景園築庭400年を記念した縮景園と近世広島の絵画、中央アジアの刺繍～スザニ #乙嫁たちの手仕事、5つのテーマで当館コレクションの魅力を引き出します。ミニガイド『南薫造 光の表現を追求した画家』や『柿右衛門様式 海を渡った日本の磁器』、そして『築庭400年記念展示 縮景園と近世広島の絵画』もぜひ手にお取りください。あわせて美術講座や刺繍ワークショップ、そしてインスタグラムのライブ配信などの関連イベントも開催します。

当館は新型コロナウイルス感染拡大防止策を施して皆様をお迎えますので、ご理解とご協力をお願いいたします。御来館のたびに新しい美の魅力を発見し、心とんでいただける展示をめざし、今後も努力を重ねてまいります。これからの所蔵作品展にもご期待ください。

【彫刻展示室】青磁と白磁と青白磁

やきものの表面を覆うガラス質の膜を「釉薬」と言いますが、釉薬は金属酸化物などの材料の組み合わせ方や割合などによってさまざまな色や質感を生み出すことができます。青磁には青磁釉、白磁と青白磁には透明釉が施されますが、実は両者の成分はとてもよく似ていて、含まれる酸化鉄の量のわずかな差や焼成条件の違いが発色に変化をもたらしています。還元焼成では青く発色し、酸化焼成では黄色やクリーム色を呈します。また、還元焼成で酸化鉄の量を増やせば青味を増し、少なくなればなるほど無色透明に近づきます。

中国を起源とするこれらのやきものは、古くから多くの愛好家に賞翫されてきました。また、多くの陶芸家はその美しさに魅了され、制作に取り組んでいます。この展示室では、中国の古陶磁に倣った板谷波山や河井寛次郎の気品漂う青磁、中国宋代の古陶磁を手本としながら彫りの技術を究極にまで高めた塚本快示の凜とした白磁と青白磁、さらに、彫刻的な造形へと進化させた鈴木治と宮永理吉の現代的な青白磁など、近現代を代表する陶芸家たちの青磁と白磁と青白磁をご紹介します。

天高く馬肥ゆる秋。高く澄んだ秋の空を思わせるような、清らかで爽やかな釉調のやきものをお楽しみください。



塚本快示《青白磁牡丹文平鉢》1965年 磁器



【第1展示室】ロシア・アヴァンギャルド

1917年、ロシア革命を経て、世界初の社会主義政権が樹立しました。産業の発展に向け国民が一丸となり、格差なく暮らすユートピアが目指される中、美術を通じた大衆の意識改革に乗り出していったのが、ロシア・アヴァンギャルドの作家たちでした。

美術の分野では、革命前の1910年頃から、すでに革新的な意識が萌芽をみせていました。写実的な保守派に対抗し、キュビズムや未来派などの西欧の理知的な美術と、ロシア固有の素朴な文化との融合が目指されたのです。

この流れを汲み、絵画芸術に最も根源的な変革をもたらしたひとりが、抽象絵画の祖ともいわれる画家マレーヴィチです。「無対象絵画」と呼ばれる彼の作品は、白黒の円や正方形などで画面を構成することで「絵画＝現実の再現」という常識を

覆す、まさに前衛的な試みでした。さらに、^{アヴァンギャルド}リッツキーやロトチェンコら、ロシア構成主義の作家たちは、その芸術的な探求を実生活に結びつけ、広告やブックデザインなど幅広い分野に応用していきま

した。1930年代に入ると、スターリンの全体主義の下、社会主義リアリズムの美術が台頭し、ロシア・アヴァンギャルドは終焉を迎えます。時代の波に翻弄され、夢半ばで潰えたともいえるこの運動は、しかし今日、特にデザイン分野で大きな功績を残しています。

この展示室では、当館が所蔵する関連作家の作品と、書籍等の資料を通じて、芸術の力による社会の変革を夢見た彼らの、挑戦の一端をご紹介します。



アレクサンドル・ロトチェンコ《ドブレット・ポスター》
1923年 リトグラフ・紙

【第2展示室】小特集 南薫造 光の表現を追求した画家

今年、「日本の印象派」とも称される洋画家・南薫造(1883-1950)の没後70年に当たります。これを記念して、この展示室では、光の表現を追求したその画業を紹介する特集展示を行います。

現在の呉市安浦町に生まれた作者は、東京美術学校(現・東京藝術大学)を卒業後、ヨーロッパに学びました。帰国後は、文部省美術展覧会(文展)での連続受賞により、若くして画壇での地位を確立。印象派風の光の表現を用いて、人々の穏やかな日常を包み込むような街並や農村、季節の変化が生み出す自然美などを、温かな色遣いで描いた風景画で知られています。自然の多様な姿や異なる文化・風土を求めて各地を旅し、インドや朝鮮半島、台湾、中国など、アジア各地にも滞在。終戦間際に帰郷した後は、島影と穏やかな海が織りなす多島美や農村風景といった、瀬戸内の豊かな自然の恵みを好んで描きました。

このたびの特集では、22点の油彩画と関連資料により、初期から晩年までの画風の変遷をたどります。広島が生んだ、近代日本洋画史を代表する画家の画業を、小林千古、鬮光、菅井汲ら常設3作家の作品とともにご覧ください。



南薫造《白壁の農家》1908年 油彩・画布



【第3展示室】築庭400年記念展示 縮景園と近世広島の絵画

当館が隣接する名勝縮景園は、元和6年(1620)、広島藩主浅野長晟(1586-1632)が茶人・作庭家の広島藩家老上田宗箇(1563-1650)に命じて作らせた大名庭園です。その初期は城下の四方を眺望できる高樓を中心とした開放的な庭園であったと考えられ、現在の姿に深く結びつくのは江戸時代中期(天明)の大改修以降のことです。浅野家歴代による度重なる改修を受けた勝景の数々は変化に富み、深山幽谷の趣をも帯びた園内を散策すれば、実際以上の広大な空間に驚かれることでしょう。

築庭400年を迎えた縮景園に息づく広島の武家文化をより身近に感じていただくために、本展示では江戸時代前期の広島を代表する画家でもあった四代藩主綱長(1659-1708)、大改修を主導した七代藩主重晟(1743-1813)、その近習で縮景園に關与のあった岡岷山(1734-1806)らによる絵画作品、縮景園の本歌ともみなされた中国杭州・西湖や名勝指定前の縮景園を描いた作品などを取り上げます。綱長の時代に安置された《木造十王像》、最後の藩主長勲(1842-1937)によって戦前の縮景園で保管されていた能面(饒津神社所蔵の被爆能道具)など、縮景園の関連文化財も併せて紹介いたします。このたび当館での初展示となった作品は数多く、本展示が皆様の新たな発見や共感に結びつくことになれば幸いです。



浅野重晟 自賛《鶴図》1773(安永2)年 絹本彩色 明星院(広島)蔵
後期(展示期間11月9日～12月24日)

【第4展示室】中央アジアの刺繍～スザニ #乙嫁たちの手仕事

この展示室ではシルクロードの中心部、中央アジアの刺繍や民族衣装の世界をご紹介します。

旧ソ連領中央アジアは、東に中国の新疆ウイグル自治区、西にカスピ海、南にインドやイラン、北にロシアが位置する地域で、1991年のソ連崩壊とともにウズベキスタンなど5つの国が独立しました。この地域は、刺繍や絨毯などの染織制作が盛んに行われ、ジュエリーや木工、陶芸やガラスなどの多彩な工芸が花開いた地でもあります。

当館は中央アジアの染織品と金工品、ジュエリーの大規模なコレクション約900件所蔵しており、国内最大にして国際的にも優れたコレクションとして知られています。

今回の主役はスザニと呼ばれる刺繍布です。スザニは女の子が幼い頃から準備を始め、嫁入りの際には数枚から十数枚のスザニを持参しました。一族の女性たちが木綿布に絹糸でびっしりと刺繍した、豊かな感性と色彩感覚で作られたスザニは世界中で愛されています。今回は岡山県立美術館所蔵のスザニを交え、よりバラエティに富んだスザニが並んでいます。当地では、数多くある民族ごとに民族衣装や装身具の様式が異なり、着用者の所属する民族や既婚未婚といった社会的立場を表現しました。

19世紀の中央アジアを舞台にした『乙嫁語り』連載中の人気漫画家・森薫氏が当館のために描いたイラストとともに、漫画の舞台となった中央アジアの手仕事の風景をご覧いただきたいです。



刺繍布(スザニ)、シャフリサブス、1850年頃

【関連イベント】

■ スライドトーク

① 広島を代表する洋画家・南薫造について、画像を用いて解説します。

日時：10月10日(土) 15:00～(1時間程度) 開場14:30

講師：藤崎 綾(当館主任学芸員)

② 縮景園築庭400年を記念して、縮景園や近世広島の美術について解説します。

日時：10月24日(土) 15:00～(1時間程度) 開場14:30

講師：隅川 明宏(当館学芸員)

③ 《伊万里色絵花卉文輪花鉢》(当館蔵／重要文化財)を中心に、柿右衛門様式の伊万里焼について解説します。

日時：11月7日(土) 15:00～(1時間程度) 開場14:30

講師：岡地 智子(当館学芸員)

①～③ 場所：地階講堂(定員200名) ※要事前申込【Tel.082-221-6246(当館)】※聴講無料

■ ワークショップ

中央アジアのスザニ刺繍を、ウズベキスタン産の絹糸と布を用いて体験し、小さな刺繍枠を作成します。

日時：① 11月21日(土) 13:30～16:30 ② 11月28日(土) 13:30～15:30

講師：福田 浩子(当館学芸課長)

場所：① 大会議室 ② オンライン

定員：10名／両方の参加が必須

参加費：250円

※要事前申込【Tel.082-221-6246(当館、受付開始10月1日(木)9:00～)】

■ 対話型鑑賞

秋の所蔵作品展に出品中の作品から、学芸員が選んだいくつかの作品をみんなで話しながら鑑賞します。

日時：① 11月22日(日) 13:00～(1時間程度) ② 12月12日(土) 14:00～(1時間程度)

講師：森 万由子(当館学芸員)

場所：① 2階 展示室 ※ 申込不要、要入館券。2階会場入り口でお待ちください。

② オンライン ※要事前申込【Tel.082-221-6246(当館)】

定員：8名



【インスタライブ配信】

展示室からギャラリートークをライブ配信します。日時は当館SNSでお知らせします。



公式Instagram

【ミニガイドの無料配布】

「広島県立美術館 所蔵作品ミニガイド⑬『南薫造 光の表現を追求した画家』、⑭『柿右衛門様式 海を渡った日本の磁器』、そして『築庭400年記念展示 縮景園と近世広島の絵画』を、来館者に無料配布します。

(在庫限り)

【媒体掲載用の画像提供について】

※いかなる場合も本プレスリリースからの転用はご遠慮ください。

※都合により出品作品が異なる場合がございます。ご了承ください。

※画像については提供が可能です。ご掲載の際に画像がご入り用の場合は、当館までお問い合わせください。

※画像掲載の際には、画像とテキストが掲載されたレイアウト原稿を事前に当館までご提出いただき、

1週間程度お時間を頂戴いたします。ご了承ください。

問い合わせ先

広島県立美術館

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

TEL.082-221-6246 FAX.082-223-1444

E-mail iroeuma2@gmail.com

担当 学芸課 神内 有理

総務課 広報担当 一色 直香、弘津 かおる